

「御名があがめられる時」

詩篇 第135篇1節～7節  
マタイによる福音書 第6章 9節

説教 岡村 恒 牧師

〈主の祈り〉は私達が地上を歩む時に、なくてはならぬものです。「あなたがたの父なる神は、求めない先から、あなたがたに必要なものはご存じなのである。」(マタイによる福音書6章8節)「だから、あなた方はこう祈りなさい」(6章9節) そう言って、主イエスは私たちがどこに向かって祈ればよいか語り始められます。祈りは、呼びかけ・内容・結びから通常成り立ちます。「天にいますわれらの父よ」(6章9節) 主イエスがお教えになった、この呼びかけの言葉は神の特別のプレゼントであります。

被造物に過ぎない人間が神に向かって「父よ」と呼びかけることは許されないはず。「父よ」と呼んで良いのは神の一人子イエス・キリストだけです。ところが主イエスは、山上の説教の真ただ中で、人々に向かって「父よ」と呼びかけて祈って良いとお教えになりました。

初代教会では、〈主の祈り〉は洗礼を受けた者に初めて教えられる特別な秘密の祈りでした。今日、私たちの教会では洗礼を受ける前から、この祈りを祈っています。祈り続けているうちに心の隅に育ちかけた信仰が、確信となっていきます。祈りにはそういう力があります。

信仰は個人の内面の問題ではありません。兄弟姉妹と一緒に「われらの父よ」と祈る、それが信仰です。キリスト教会が日曜日ごとに礼拝をしている理由はそこにあります。神の特別のプレゼントとして与えられたこの呼びかけを、朝に夕に食事の度に、1日中繰り返す口にするのが、私たちには許されています。祈る度に自分が1人でないことを思い出します。この呼びかけの言葉は私たちと神とを堅く結びつけるだけではなくて、兄弟姉妹の間をも堅く結びつけるのです。

〈主の祈り〉の構造は十戒と重なります。前半で神ご自身について祈り、後半で私たち自身について祈ります。出エジプト記では、神はモーセを遣わしてイスラエルの人々を救い出して自由を与え、十戒をお与えになりました。〈主の祈り〉をお教えになった時、主イエスは、神が私たちを愛し憐れみ、必要を用意し、祝福しようとしておられることを伝えた上で、このように祈ればよいとお教えになりました。

「御名があがめられますように。」(6章9節) 聖書の元の言葉では、「神の名が聖なるものとされますように。」です。十戒の「安息日を覚えて、

これを聖とせよ。」(出エジプト記20章8節)と重なります。〈聖〉という言葉は、他の物とは違う物として特別に取り分けるという意味です。他のものと並べて、これがまたという比較の話ではありません。様々な宗教や信仰があり、聖書の神は他の神々より少し秀でているという話を教会では一切いたしません。聖書の神だけが唯一の神であることを聖書は明らかにします。

主イエスは今も生きておられます。終わりの日、私たちの所に再び来てくださいます。このことだけを見ても、神が聖なる(特別な)お方であることがはっきりしています。教会は、主イエスの復活を記念して日曜日ごとに礼拝をします。神が特別なお方であることを皆で告白するとき、やがて滅び去る世界も、また永遠なる世界も、神の手の内にあることを確認します。主イエスを救い主と信じて罪の赦しの洗礼を受ける時、私たちもまた聖なるものとされます。神の目に特別な存在に創り変えられてしまいます。この出来事を通して、神は、ご自身の名がいよいよ高められ、聖なるものとされることをご覧になって喜ばれます。

私たちが神は素晴らしいお方だと口にするとときに神の御名があがめられるのではありません。私たちが神を信じ、主イエスを信じて神をほめたたえ感謝を捧げる、その中で私たちが神の恵みによって聖なるものとされるのです。そうして神の御名があがめられるのです。教会に集められた者を人々は、〈クリスチャン(キリストの者)〉と呼びました。キリストの者と呼ばれ、さげすまれ、迫害を受け、痛みを負う時、神の御名があがめられていることを、信仰の先達たちは確認し、喜びました。

主イエスは私たちを聖なるものとして創り変えるために来てくださり、十字架に架かり、私たちの救いのためだけに生きて、死んでくださったお方です。このお方が教えてくださった祈りは、私たちを神に堅く結び付けます。神に愛され、信仰を与えられ、聖別された存在であることを私たちはこの祈りの中で味わい知ります。「御名があがめられますように。」と祈るたびに、神の聖なる力によって、神の子とされている栄光を思います。主イエスの祈りは、私たちに新しい力を与えて生き始めさせる力を持っているのです。共に祈りつつ御名をあがめて歩みましょう。

(記 説教要約奉仕者)